

コンブの採取用具について

近 江 彦 栄*

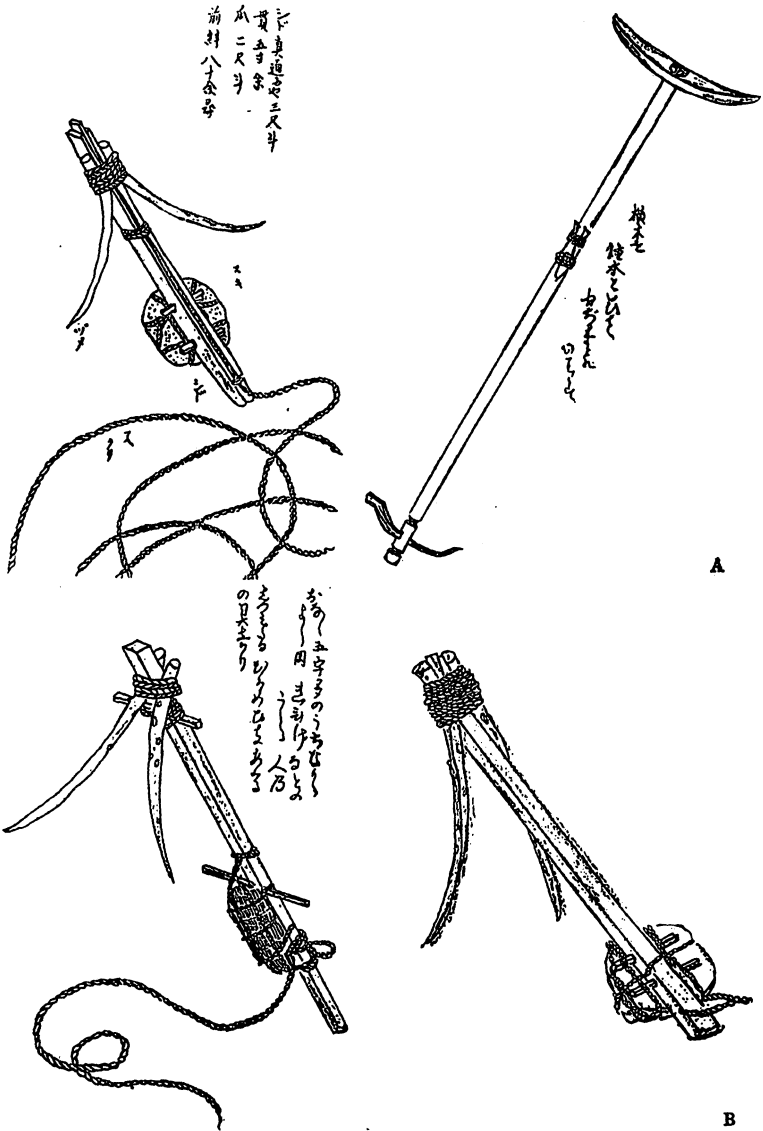
H. OHMI: On hooks and grapnels used in harvesting kelp

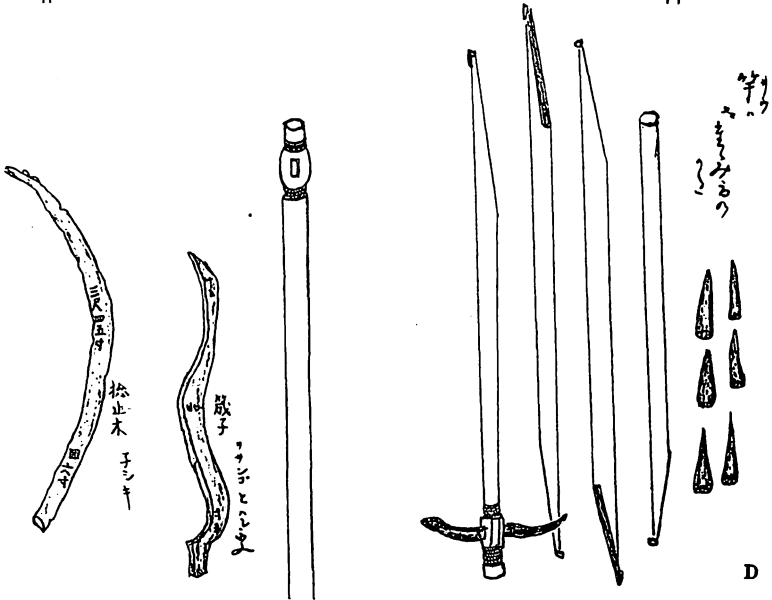
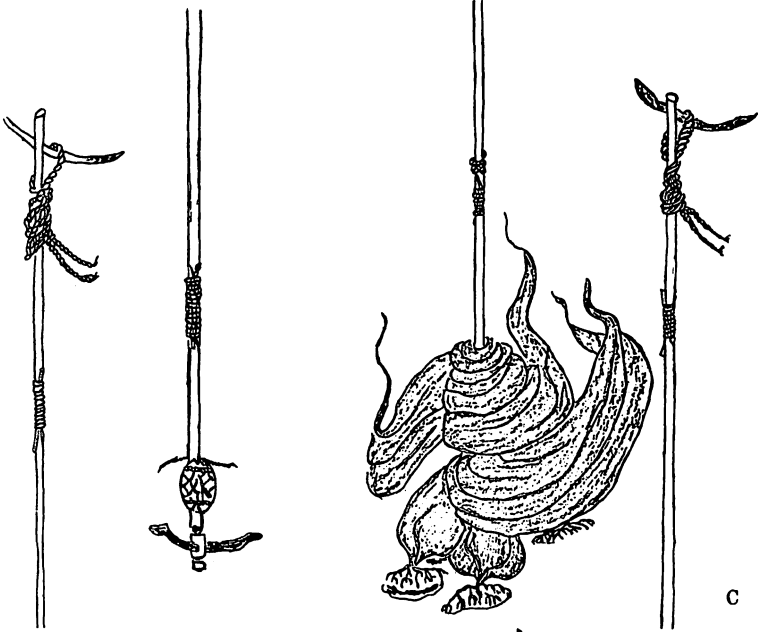
コンブの採取用具は産地、コンブの種類および生育の場所などによって、採取に最も便利なものが用いられている。主なものとしては棹、鈎（カケ鈎、曳鈎など）、まっか、捻り、かま、なげまきなどがあり、近年になって先端部が螺旋状にまがった鉄製のネジリも考案されてコンブやワメカの採取に用いられている（主として青森県東津軽郡沿岸）。

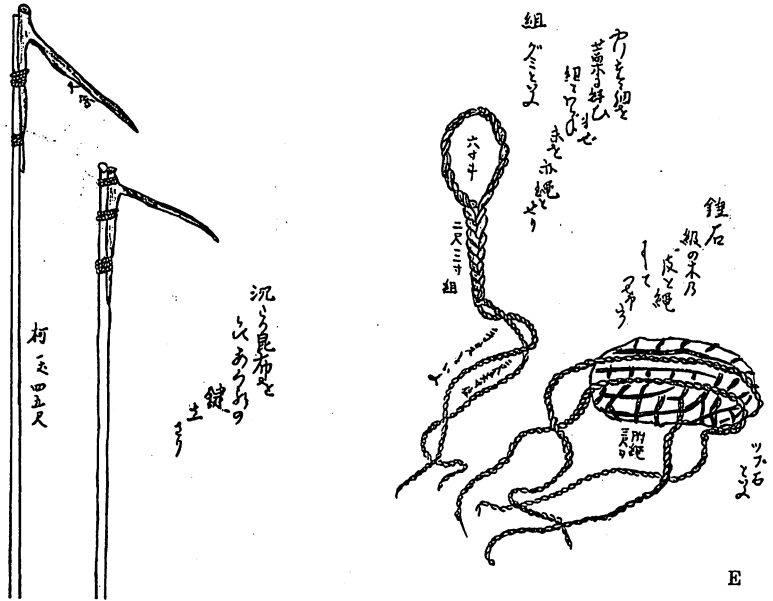
先頃たまたま菅江真澄の著作になる「婢呂綿乃具」^{ひろめかり}の写本を手に入れることが出来た。この著には寛政元年（1789）冬11月20日と奥付きがあって、「十七日、上風といつかぜ吹て空の晴たれば此運上屋を出たつ。ここにおましある観音菩薩のほとりの草の中に……」という冒頭で始まる紀行文で、函館近郊の北海道渡島支庁管内の亀田郡と上磯郡下の漁村の風景描写や漁業者の生活様式などが細かに述べられ、特にコンブの採取、乾燥、結束についての詳細な観察が図入りで記述されているので、現在の状態と比べてみて大変に興味深い。そのいくつかを紹介すると、第1図 A-E のとおりである。この著は、はじめに述べたように、今から180年ほど前のもので、特に古い文献でもないが、現在使用されているコンブの採取用具については二、三の新しいものを除けば、ほとんど異なるところがない。由来、漁民は性質が淳朴で旧習を墨守する傾向が強いとされているが、コンブの採取用具だけについても、180年前とあまり変化がなく発達のとが見られない。

なお、平凡社の世界大百科事典によれば著者、菅江真澄（1754～1829）は江戸時代中期の国学者、紀行家で、本名は白井秀雄、三河の豊橋付近の生まれで、28歳の時に家を出て各地を放浪するようになった。著わした紀行文は72種あまりで、真澄遊覧記とよばれ、自筆のさし絵を加え、地方民の風俗や生活感情を精細に観察しているので、貴重な民俗資料とされている。ここに紹介した「婢呂綿乃具」もこの遊覧記の一部をなすものである。

* 北海道大学水産学部







第1図 A-E：寛政元年当時の各種のコンブの採取用具（菅江原図から複写×1/4）